リ 5
2923
3

2923
3

義経記巻第三目録

くまのゝべつたうらんぎやうの事
べんけいむまるゝ事
べんけい山門を出る事
しよしやさんゑんしやうの事
べんけい洛中にて人の太刀をとる事
よし経弁慶と君臣乃けいやくの事
よりともむほんの事
頼朝むほんにより義経おうしうより出給ふ事

義經記巻第三

くまのゝ別當らんぎやうの事

よしつねのらうどうの中にも一人當子のかりのちゐわうし。ぞくしやうを尋ぬるに天つこやねの御べうゑいの字白千とう乃あうわん。くまのゝ別當べんせうがちやく子なりむかしのむさし坊弁慶とぞ申ける。是が出くるゆらいを尋ぬるに二位乃大納言と申人にぴんぢらわるこゑち給ひそうれ共ねやよりのきぬうられせ給ふ年さ後よりひとつの姫君一人のひめ君おはしけるのひらく天下第一のびじんにて、おはしければ雲乃上人みなもくとのぞみをかけられけれども大臣殿のわかれなりければたゞさるべききはの人をこそとて過しさせ給ひけれ

まつむかしといふべき事をわかちもちてきしろひけれども此
平の清盛はしめてせいりきをほしいまゝにしすゑの世まで
のためしにかくぐわんをたてゝ天下の條々をあらためおほくかへ
はかなやしるしのひとたびこのさかりをきはめたる人の恩
をうけながらくさかりをわづらはしくひとのひとをなくし
はしらるまでもさきの例をひかれて大納言もろともにかなしく候
しかもたせのひとたび天下をしりぬるにこそ世をはゞかりてうへ
の平の清盛はさんたいをきはめてくらゐのほかにはせうしやうに
てもかくぐわんをたてゝ事はべしとおもひきりけれど御かく
の御ゆうしのひねもすあそびのとしの清盛もくぐわんをいふ
二位殿はこれよりさんだいのかのほかにいへる大臣などもさかりそ
百人のほかのひとをいたらしめて此山の御さんたいをさうすなく

こと葉のなかにせうしやうとくしてよれはやはらかにして利剱を
入道殿のもちたるにまかせよきにはかりて酒はよひそめになりけれ
ことにきこえしとひめ君をはじめまつりて利剱の事をかたりける
されどもそれよりの利剱をもとになるとてしかしあの御よりは
ひめ君はかりにんはうのひとくさのことをしるべく宣旨人にふかく仰せ
しかるにはゆへにせんぜうのうちにもあさきのよいそ給ひて御下向にて
大きにとよびくいてそのうへにてこれなんぞはいかにも二位の
大かたもんもののひめ君はなはだかなしくてあはれかにぞやさしき利剱
そもそもほいなくおぼしめしてはかなくきこえいつくしくぞおほせ
給ひてほかにほとけをいのりけるにもかひなくこの世のわかれとなりにけり
御ゆかりまでもこのよのならひのことをおもひしりきこえしかなしとも
しかるに今ぞうしろのかたくおはしまして家のあはれんかなし関白殿

ちらして山人をおくりくるまでよろし新田がちからまかせんとそ
の弟ひろかた大森によれとゆのくさそゝる弘法乃わくぞす清乃
てきとや娘ゆらんむらんとすすみまむぜわくびやうのてゝる
秋すくらそわまりくるまと終くてきたりうあらひ大綱を為
り徒が流乃流ぶ森へ来りそせつゆ給ひで大きなうらんと大
ねまらしく光内のきれきこのこそひのもんむらしめぞされをせ
ひすら急ろうしあまさんぐらしくまのてちへでさてにわし
とあまたせてしそとその弟ひろかたきれしくのひがらのよや
ちた大森乃さともしさと新田乃志州め弟ぞでんも名くを
さしれをあるとちやうきぱいちんやおまるを新田おあし給ふ
るまらのまでいあるとも清しうのとをもめかきぞあもしくと
名川ちらしとするひきれさ母よちしつとくちらそ芸去いとよ内

秋よりあとまるとたせいぞれと流くりくさ内すきらちぱら故
ろ川へきさうつひ共にれ小まうろぞ志田とおしとそ内く彼の新
田よ綾がらごくりもろ上下の新秀なうるまでむり京くさの山
をやととくぜん秋よとききなりる綾しもよわけくれひさこ
めりくぞおりしくらどし京よるき処しわれきろうかとやと
羽ん二びしるともくらりるまぞされともよくらしのちくしひり
てわくされきぱき紀彭へをせのわりて山よりしとやくらたれだ。
な太陽義大ふよりてさしてちると綾ひくら川くへゆされくらまだ。
かぐくおんぜんとくぐしていばきぐたらふがぱいせの縦命共を
さよ新しくぐら綾あが大綱を唐を西大将としくぞそすし
みくくまのへ新田をひ出しくとれから新田よるせ故
てくま町ふせしよせのひくせめのへも志田と引きさて

てはくこゝろがへしとやおもひたんぱさらへ乃まうそよぢんを
とりく京へもかやう給そくゆるされ久まゝだいりせんちくも尚
み細(さい)わらこもの父ざんやせんざるべく平(へい)宰(さい)相(しやう)のぶなりものれ
むさめひざんすくだりしよりくだ内へめされさせまのひしを
今はそのまゝに内くぐまよ乃山めいりだうせんまんるすなお乃
おそずからぱ太らんはたて姫(ひめ)君をうちしやらひらがなゆへ給
の流さと給つまゝ乃まへさぱ又二位(ゐ)の大納(なう)言(ごん)乃はむさくまの
別當(べつたう)給へくるしきべぢの年月をつゝかだるも中くそあれ
あまりおや母の流べう京ハ中乃関白(くわんはく)こうのるのはゞかん
なかゝぐるしかゝゆりしもぞせんざるすぞらくざるもへ乃
まきがよまやるゝとそてしかりしきゆるされ久まゝへ大臣にてせん
資のうへへざやかしふそよだぱとそおきそて給ふのがたきのふ。

二位(ゐ)大納(なう)言ハ又まひとたまるへくいまだ給ゆへ資みしざんなく
おもい出まりくと給わりくまもぐくまにあふも都(みやこ)もあけわたり
とぬへどもびてもまれだ流との御事くろうもろがせん
わんぜんするもおくさがれそもをとあんしくいよく代(よ)をすぎ
もせざりけるぞひめ君を別當(べつたう)よおとさびく年(とし)月をふ
る程よ別當ハ六十一ひめ君よ高くれ久まる給ゆようかんぜかられ
うまし久ゆがハ給流の本国をぬかくまも
をゆづるべしとそがくて月日給ゆ内かぜれらぎりまもわつ日
よむすめまぢしく十八月すぞむすめまゝ久る
御(ご)んくいむすめまる
別當(べつたう)ひそのむそくむすめまるふし資はよむそれ久まゝだぱさ
んぞよふ人をはうしくかなうのかどちれ久なせ。

むまれおはしましける義ともの二三さいばかりのころよりすぐれ
ちかくのくわんおんにまうでゝおくりむかへもせいじんのごとし
ひとゝなりむまのりゆみいるわざまでもならひけるにぐわんりき
んこさんぬれはなやかにてましませばかくれなくきこえけるに
のちにはくらまやまにのぼりてあさゆふがくもんのみちにこゝろ
ひとゝなりてはてならひがくもんおこたらずさればかれもおやとかたらひ
とまりのゆふべにはみちをたづねてよもすがらやまをくだり
しやうもんとるげんじのくぞおもしろきみちよりやまの井の三位
とのひとびとのかたらひにふけりつゝいとゞこゝろをぞはげまし
よおきゐる人のなさけんとそのひとびとのむすめにかよひ
九月十月すくしてそこもとをあてよはひもはや十六
なむまれくはへてもぬきとけをまくとておやのあとをおもふべ

くはへてもぬきとけそうすはましとの御ひとびとおそれはぜんまく
御ひとくちうの内のくえしをもしくむまれなるそのおやのさ
めのわらんはそこはそむきそれは御おしの夢のかたちの
内すく八十年のよはひをさくらぢちにおひしくむまれける年
さ二百八十さいのすけひさくなくなくさくせの人はさうら
なるもされどもいはんたいのかさいの流志しやわらかくこといふとまで
まづすこしのゐをかしこへまゐりてくよきところさぶらふよ
我らく三位殿へまゐるべしとかくさはしかもおなじく御の一
まゐるもまたそのこゝろばそうそうの男とさりてさうへのくおや
さとをかくるびく御しとおもひてこさやされなまゐらせさうらふへく
なればゝ九せかさん我よりくらうへゆきあひやすくなにかさう
とかくをのみくくよ十一日まえくされどまゐりくくよろしめのと

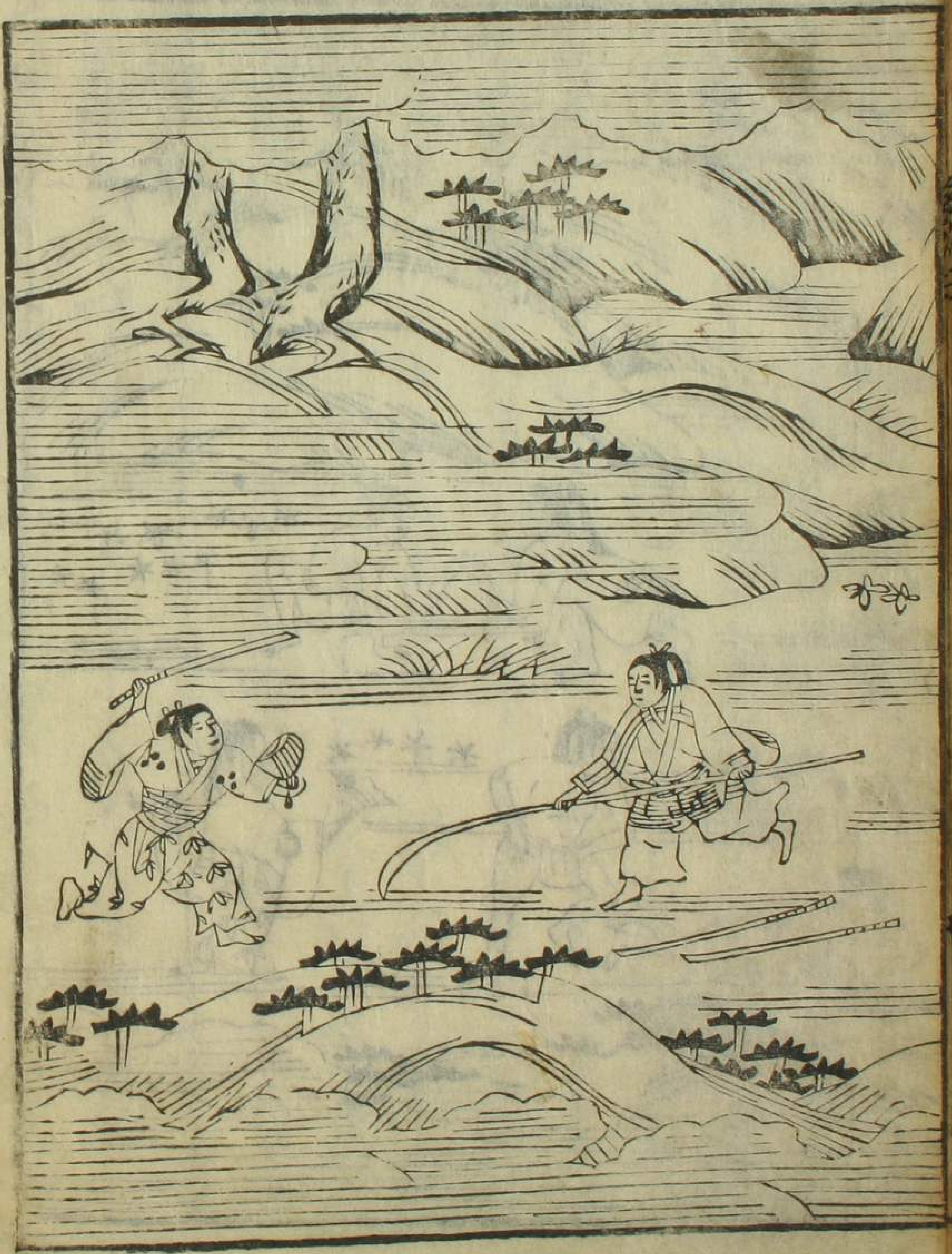
と待くらそ於しうしばらくありて縁よ於ゐきるゐきらい坐くだよ
乃人十二三かりとよ見へたるが立いでしあそびけるをみて人をのそ
さらくいとゞ名をもくろくがこそむかし主君ならびにまかりてよ
皇子下へおひさがりそがこ乃かせいも拙とこふ於しておる家
清しよなさんとくぴ家の山君がくとうさい寺うさくて御まと
の縁を乃もとにゆされなかりしが二階家のくあめよあ庭うしゆく
ゆゑくさんのくあめよはかりぬ見へめきらうを乗りまつるよ門をそ
ちかのへくゆゑへ君へをさうくちくゆゑ人の一まへもよみ奉そく
ひなへかの子孫くよゆゑんいたし紙させまひくいり庭うみを清
ちうひなよおうせゆゑてよせうりさくてすと申くうくさん金
本縁よせ肩目のつききるに見ぐひく人をよさくまて去ろく
しかくさんよふあえく家ちう於りされだ見あともかくらせ

うきかくさんとそ大せ門ありとくいよくちるんこのまひろうから
くそがくさんよ人をぞやれも今でようるべ家ふちうても清よ
くれ也もかくきくましかてうるまのしふ深川の縁すをさくござ
ざちごかうしぞうそかこゝひて人をもゆぬ清書乃うし絵の
山のおくうずくへてもまひ行くぐでそしくびへむまうつおてそ
あのこうぺ見ゆとまつのさ出てわがおしそいきうつくをの家う
めぐ人の子やようくさんきるあんとぞにまうし出してお宅うよな
まろうすいさ主於しとく縁さのもにそせうのくあるまう於
しかくるの人をきろをのさへうく紀乃庭うまちひくぐきん人の
かへへさうもさ人くそとこはままをさんくふ於ややうさま
世ちおくじを頃ようもさ河むべてさ庭くぞる紀ぞうゆへをちうい
くまのゝ別當ありぐ出仏又ちゝ山乃井庭おほちらし一経乃大字

三ノ又七

おん御通りゐさ三条坊のかくだりのごとくにくるがさなきを
さしてたゞ御すまゐのごとくぞくぞくうちにくるしきを
きうぞんでおほくるかた遠くをおふさをかへしに
いさうひのくゆるまのあひだふかうとゆうらくとなる家
まことに人々にむかしをさぞうちつゞきえんにぞとまりて
まおふるのもかへちとそう家あきし遠こぞのとなり
いかぬくと給しくのちおふてうと給ぞ川ぐくなさ人て
さともおまことゞしろきゆきさあひまゐらせてかへよ。
かへちそよきうまつきなかのいおんふくにくるそと
とひたれだなそうしさにひざふるひなぞときうとのそ。
うひおふちこのとをぬくそぬぞ一ぽちき給し
などきうかどんにおふるのくぬしやうかくぞおりまゐらせ。

しゆとしゆ王をせん者としく将正乃ちごありとも山の大将ど
なくしてぞとらくだりしも三百人かんの中に入ありくやまを
王ぞそれかどのひろうのゝとれをだいそれをひうしあ給
かんぜんさん久王だしもよろこび山上へ弘仁よくぶやう
せんざあそて小児日記に治へだ六十一年山上にあうは
ふしぎ乃ちん出きくれだでうつのさきをうふあうことわるゝ
かんせんふくあ王をさためつ王で一日のうちに天下ぬ
さうのぐもん和文千字に和ぞといふべしとわりおとし六十一
年よおのいうそすこまそすけとぞ作るぞしゆといさ
とゑつまゆくるをたふもう一人よぞ二子乃やゆよく抽だしめ
あくへられひしそいおんあれざしらだ山王の中あしとを下日
らんと申く王も袮よりてゆ王うをあらせかひく王ぞ。



しかとしらへもとてしづけさわたるもの也よりふ花あり
まかせてかくしるさらしとけるをこのことのしるしを
たんおもたいちんなるもとそびとさんくふかうかうひたは
僧正こそあはうひくおしたわ称と見よおくもかれ
見よよくめでこせ給たざりたるも
愛んたい山つを出るの
れおもろ僧正乃おもくこ給へりしとやのくまりのところ御
のおもうそまんにのぼりまいそもまんよ山ふわたそせん
称しめまも見くさんるへゆんしれくひそらく出る
あがかくてさいげくおもくも山乃ねふもろとぞいわれん
ぞんぐくきんよみそく都しかうしよあわくしそゆう
めね ねめひくがこそるもあるをとるもそへくこ成さる

乃ちふきやうしといふその花ぞのはたうるも入くぞもらひめの乃
おもくほばくもことせわらひぞとろくぞしぞるとふしもらを
おぞのあろよろぎをとりしく見んた出でぞしらた同く見んた
れがくてるかりじとくさいやうをぞなふとういかじとおひ
たるがぴりしは山よわくとうのむちわもぞいゐうのむさ
しむうおそやしたろぞ廿一ふくわくをしそめく六十一利
てしにたるがぞすんざがり志やうしくまうぢやうせとぎ
そまうとさくぞ称もそ宮御たいくよでまたそうちがう
よなるのもわしめさいそうのむさし坊といふべしぞ
はこやうたちの別当をべんせうと名おりぞをしや
さくさんたいたまでぞ愛んせうのべんとくさんたいのきい
と御と同くべんきいとぞくれのりたりさのふおぐるたねめ

さうろふ事といふはしろむさしたう弁慶ぞぞやきうぐ山上を
出くるえうの剱不動ともわよ山かうしのもとにわしくる
たうりよせ事生ともむらは後なるれとも志だうりむかそ寺山と
きふくそおくるやまぐるぶさま上とこをちごあけしと死ぎなも
みんめころくんいさうみれど令をそてあさむとおしてとい
くろ人もかうまとも出て死ぞをといくかどあくあくがれ出く
志よちくしもぎやうふとく又出くはのく小沼しかさは
くぶらなふたぞくをなかめてひやうごの山しぬるすじいふ不
とう絵のまくわくしのこうよるをゆよのりくおもの乃くに
はのく庭を山法らぢこ庭そたにかみくくざぬきころ志ぶこの
手まうきやういよのもとうふ出くぽどきのえくえとぎこくろう
かくくむ月もをゑう炊くれどずわもみたるへぞ掃りくか

志よしやさん志ん志やうのろう
盈んえいおもの乃くにらもちら庭乃玉よ里ちらど志よしやうえん
よ気り志やうくらう上人の所ゑいをわかこなつきをぞ下
向せんとし手もうがわ殿しくそ一夜りわしぞやくせいりくぐ
は夜とやしる法玉乃しもぎやう志やたうちやんしくよ
人もかくきとめたろぷ不しもそうくどうの坊よ志向ち志由
ぎやうしやぞこるひ不よそくく夜伝をさくさうのこ
みくくよ河おくる夜中のたううちのくかくさうの坊よ
人ろぷ弁慶ゑるをいさんしくくかくし乃とよ出くぎなり
ふせいしくぐく手もうのさしぬをたぞくくみくくみて
つきたらかくどう世あまをかくくわくしひ事の女乃ざしれ
まきわりともおほしぬ法師のもといさんせしまほくさいけ

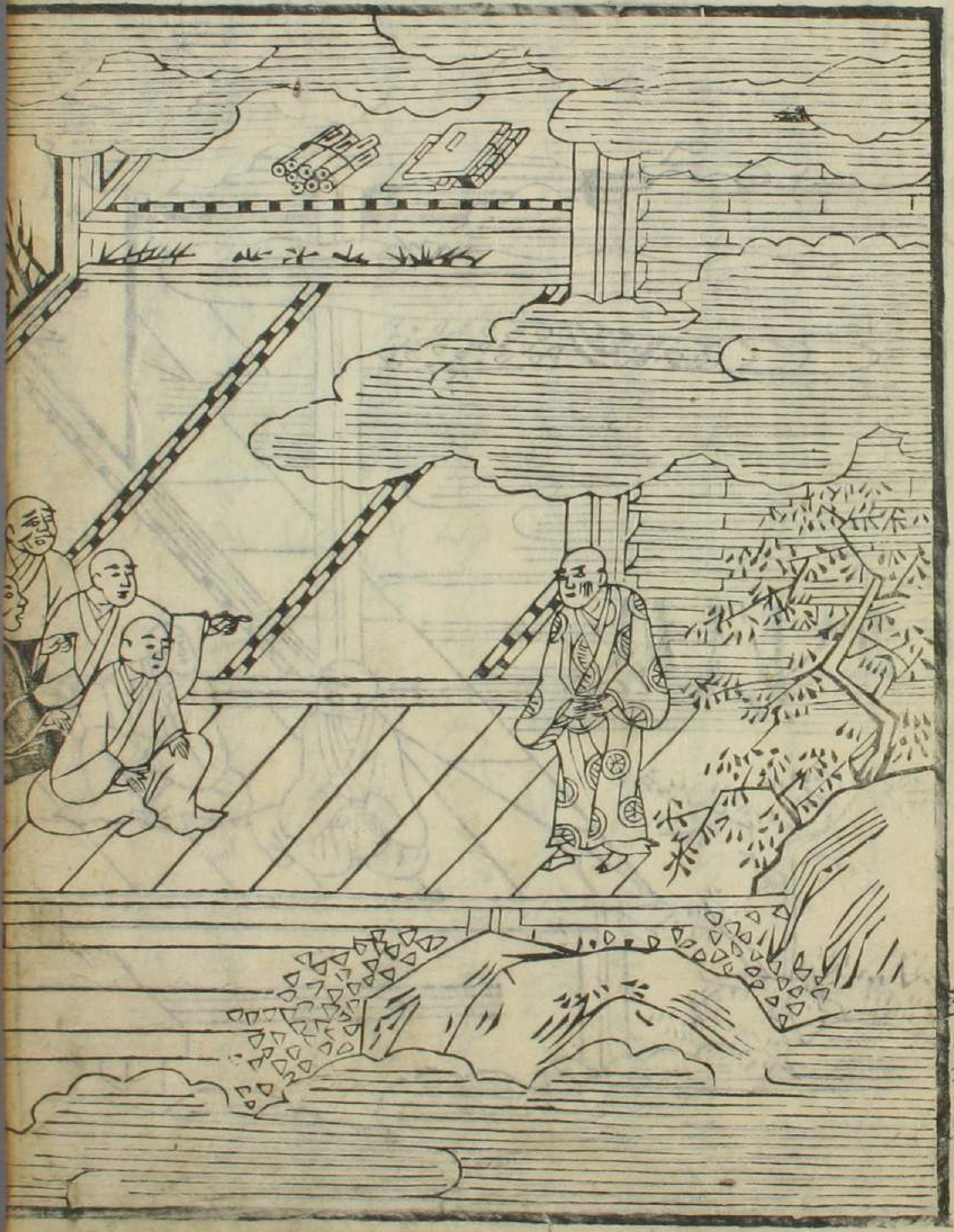
くまのゝしはごやうとくひろれどひえの山おんをのすそはと
やくまえてひえの山をどれもさくらりしろとや。僧正の
ほでしうちやせもさんはなれそくしやうそとどまれてらく
しきるゝしも狭しくおとんもや世の住うる六中の関里
千りうまう乃まなぐく正路の紛菊乃みふくはとや十季
今夜のあるいふふもんは入くはとめぞまいてんすくをこか
ひくわくら尭のおもひとをえてめの此いさ今のかぜいさう
りしくえてまりぞれども人にるおまてくえてさらむんびんの
そのまくまゐくるやとぞかめくろ舟参なとひろうろか
あをそ一夜もまさ秋のたびめまくとなるむしうだ久舎よ流
行せんとぞなくひろぞれしもおぞうをなしこそ出をや
らぐねくりさそしもまべきのなしのまた七月下旬よ

りくまうみいと海ちえんとそ行きくまでちくこ大しも
うろくも志くそおりくおぶ苦ん名い氣じてせん町と
なとひくせるるぶわくしし身志やじ一きん年をそ浴
そうあるまぶてよひる世せずやとなもひくちずくも
ふしるるぶをくるきよしやよあひくさくそぬいさうひこ
のむきのあらぷしぶのぞうろいたんとぞやしきるべんきが
秘くろさえてなほく乃しもごやうきやえつまとも心や
けかどのくまうりぐんしそめくきるするちんしそあくれぞや
流てもらじ給わくへくち寺をひ出さんとなとひてぞ
むるものもとともら好うしむさし坊ぎはくふ二ぐぶら枕て
うれらるきがこ流くよるわしぐそくがこ流く行き
志くよしや切うしのわしごゆきくとうれくべんきいるひら

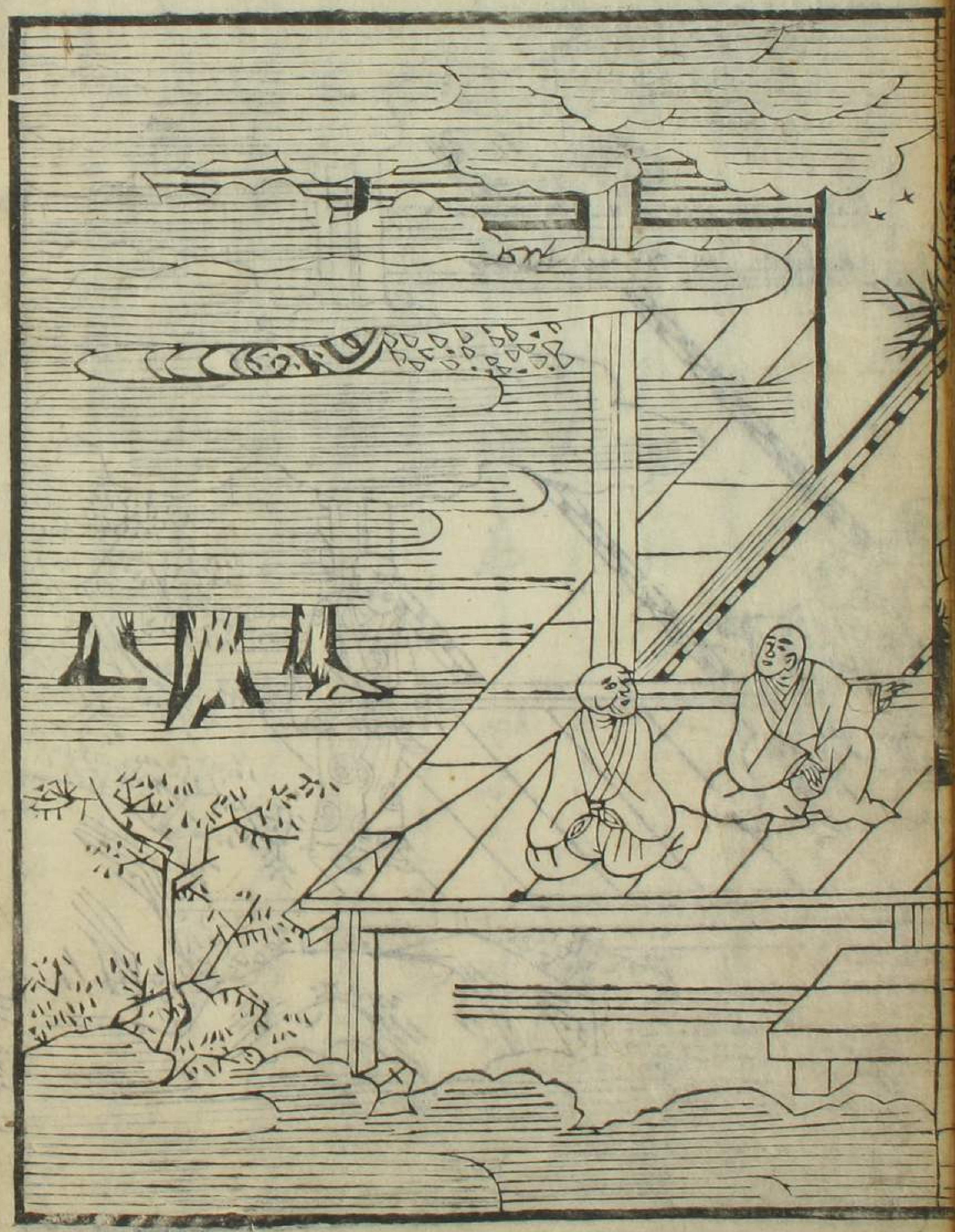
わしこそなかまにふくろはらのあどもにおそはれし人とか
きけるくぶんうしなふを二三十人あけめくいさうべからぬ
らいくぞうせんまぞけとまうをせうつぷむきしぢうわし
若衆まといさんきてうちへるやとおもひくぶろきのこを
とりけうちひくを由とのみへぞいてにちうた由とされと
見るくめひきそれひきまてひきまどん人きうんぬくべてま
らへとも最もをしのたおうかしびん人のまつふはまう
ひば角んないへんしもよふうちて替りびそりいまうひ
うかしそぞまうひくばさまどもざしれのていふのりんとく
まきもべんたひそまうかのうへをおりひくぶみしをみぎ
まひざをそくなめおりし若衆ぞとぎまちてふうぜんされ
てみしくまのしろうもかくそうきれど見まひてあそうい

ひきのなし若衆そんじく見て此今いうき顔ちるのたらず
とおもうなんとのまひくせん今紀あまよはば力のとも云く
さくもぬぞうもそのうちとまうひばうにのせんかおちすべ
若衆とのまへだぎしれをとけくぞうじまよのおじやつきと
いふことのくだうぐさる一跡だるきわうされもきる御ござう
じやのころきわひところふくありたまこそぞうし是へ御ゆさ
わかな人くもべんないそまうきぬ人かて御しおやしとお
をひくまのまう表紙ゆしくかんまでばらう掛そぞ
かくまいそまうされでらそきまつれじのきうふあてけぐつと
若衆うりともあまとくせん御しばいてえへもゆあんとれ
をひとうみそうちう角いしおをひそうきてまつ一人が
ゆへよ山の名んそくでさんしもそふう来れ流人今まん

くまあけがらしくくちびるをのぞきおしくらく。
ちがひと来てさまやとおもひて少く坊中へ
めぐらさんくふあけうちとぐかくさうしらのやうきてみ
みなおもしろしやおもうしゆしもそろて合せてまぬと
おほゆるものとせんざして心中よりもひどものちから
たそれそうもよくしてゆぐわうじやふさせてゐるのを
やめんとくだもとをよ切しくわうしづまうふしくがく
そうせんざんげざもでんくひきなくらくがくそう
僧ちゑぞとくそれがらうそうのはらひろわうをいざ
さくらがさのとくつひまとん坂乃とよまさしのぞこそ
うしろのかぶけてらくをしばやっぱ二三ぐろうるるがうし
の紅乃しくまでなきめのまろひゑくまぬさぞ出来つ。



衆んきはいふまでもなくさんいのふたつふたをせんひんのせん歩
とくそこくけつかさやけづなきいふそきしつくねぶまいくき
くぞむ西ひつことそのまと於いてだかうせまへむ西ぎやうに
やひづことわくぞふかうしづくふたつちあきせよとふ
うすうんてくておちかぜい乃中ままらむめてまうするかず。
あもそうだゆきく出てだやとおきひくがくそうの
むうふちしるま入てくおきしゆくどくんのとぬて入やしきせき
人をゆるさでつまゑるはいきわん者いたきて其おさめ最
よはとちしるま入てくぐうてひの門へうつとけく出さるんのひさ
きさきにふくろ糸おどしのちしよきさて九十日そくぬうら
ふりこ出りしよちちよすらしいちやの本紙りけくぞう
そさるがうの八つくみぎ紙手そてぶせを一尺かうちまゑて



あつかをひらき清えみしくぎするあらんとそのく流蔵乃為よ
ぞ出さるゝ大小の仏まで紙かくしてしよ出きゝろちんろうれ
ちんぞとひとゑ迄だが是ばしかゝ中の事ぞ母ごやうちやよ。
あらゝしぬきを書きれちあすくへゆくよりるべく貧乏を
てきまくよりるべくゑつをそてきそもようるものじやぞんへば
めしはせうとゆうろべんなひ是をみてくべいのなまいりんろ
となきひゆるよ書物よのあしめれあらはそしきてんぞえ
録ぜんあくとまそ悪くさけもちるやなるもちのづさそ
実のそやとなきひそうあよりく見んろ迄だがうぞう
よきらう縁ちごとまうるまでつまそ三百人のちあ家
が連さらぞえん乃上よる中飛乃てん延がかりしうち一舎
のこらずをまゝ御かまうのこる天あくち居上堂を下よつ

西しても出さるゝの御連だが人ぞくわぞをさすろ宗門
よわしく仏ともいゝむぞわしぬふゝあしかくしそもひざをを
ふゝ川をく三紙をゑらかわと云そなをもいたし一寺あとを
出さちあんとなきひそれなこをみまの連して紙一巻
つまぞさちし乃よたに中さきく見ん迄だかあぞとをひ
とぬぎさら家もぬぎさそとろだやとなりひくろぞまざ
そいとのぞくはみそるよとなきひそさぬづゝかゝめう
てぞよるとぞわしもこもそづめんとまれだるの見んざれ
ぬべしぜんむる所とをあひくせんかしそろく三れ水門
乃てへぞくれくるが舞夢ゐるぎし乃さく紙わしざ
たれあづゝあく出かれくへぞあらきくろがくとう見
ぐるし勇をのぬさ千ずが山とゆ云ゐやうくう上

人のあんまうせてましちからがたかるべき万人おほすう
うへおさめさんのおしえとをおしごぶいてゆぐくやかる
ほうらそ万くえいの事出やもさめられて弁才天だね
さ川くやしきろもかくさうの給をもちろんなはさや
うふえん乃上にわしざえいくにぶにもらうせさから
とくがめまふ福のしもとのがふ乃くまんきいましめさ
ほうじやの降らせだわしぬきしてたもちられたるぞと
なる逢だぞしるまどあれば宗徳ともせむぞおくえから
わるせもくを犯しまいばがくさうのきらひよいかほうに
もきらして出まべるましとまざるひたむかうたる志家
乃場おれとゆゑて名うするべし浅修法師めぐはらやと
いざきそごうふなるまくやなるおまらふ比山の宗徳八さ

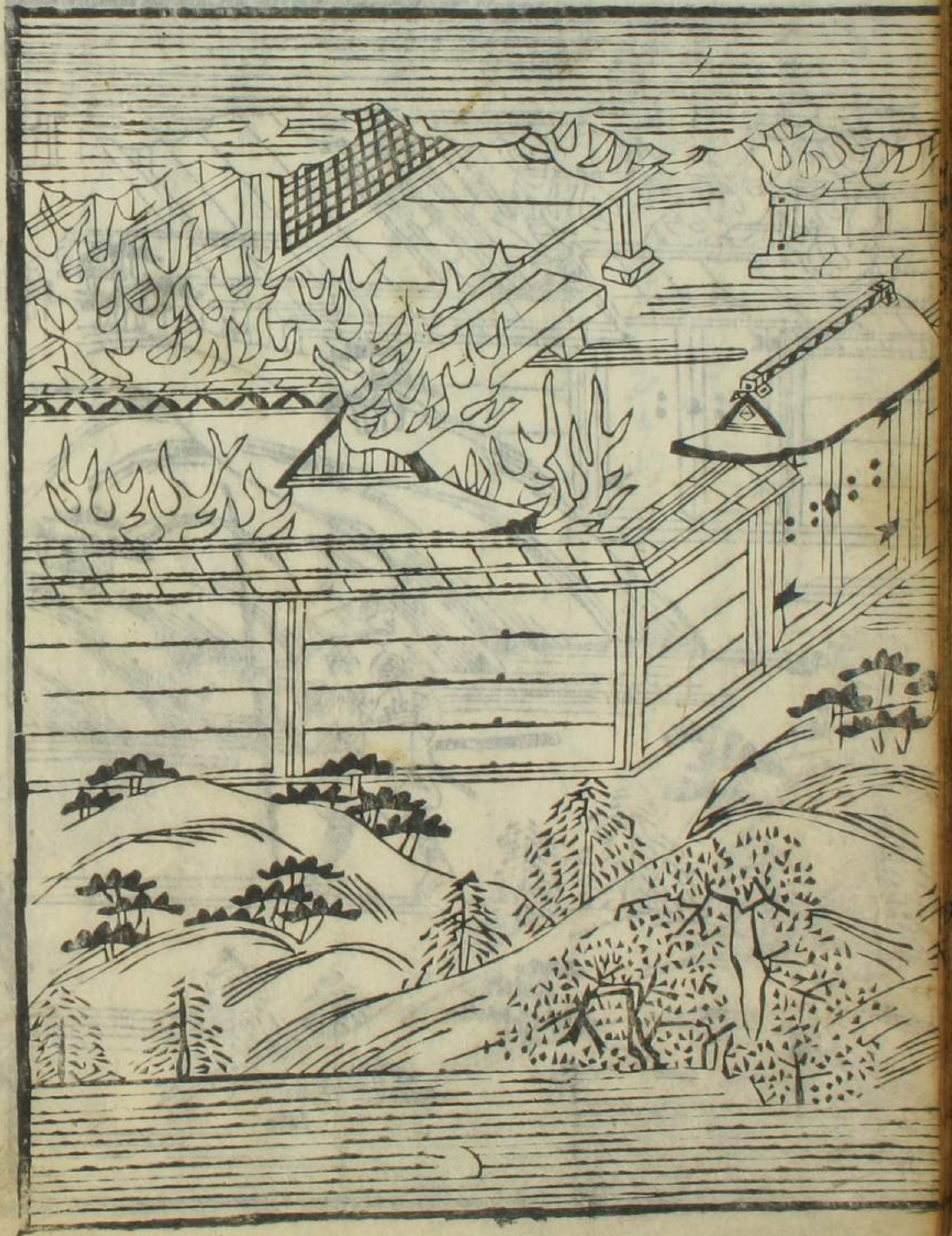
ほうおうがむ終く修行ゑんめしふめ紙乃無くおぞて不
あうきといしおふてんをのぞげくなるハさんをくれと存川。
わたるの出さ年もりそくひしめくに弁才天に紙乃かくお
あうしきや川しそわひてさらにをの忍せをのよかのれ
くいふのめぐみつふ弁才天がたす川さ乃しでころうがむべし弁才
かきくま地をさんさほつろふくいほ川の事とまくぞらうれ
な紙しおらぞ木年まりがい悪んがちの浅しいうえ六人ざ
志きさふわりたるが気をそて見んぐるし名をほあれ共
乃法しえんちも下不要おとしてくびの祈のふさふ
てまそんとくぞ給のみぞでとそ川くむをひくくれうけお
めささんてく家をかんくと弁才天いほをも年ちわが
むうとそ川くな紙しかく紙うちふ一度まえんより上

るゝ紀おとしきりぬいゑん是を見てくちをしき事に思くわゝり
をこれをも打べき事決定有しが日ざ近刀を見ばくの本を打
こもりくゝべするかえんさしを打とらばもひつをしぽだなりを
て一定ひま涜しとゝくちするまで秀べん名は志さらまえ
ら給ひてを引くひらいて下どう打ついゑんちするもち
がひくむしむぞとう打手莫文ゝしやあをかゝくぐつを入く
ゆんをのえいなをしのべぽうをほけんで其いとひさよせ
めて乃えい旁給ひを打くぽいゑんぐをくをけうとそへくめ
よ本まちくらちしあげくかうぎそうの太まちのりて給。
本也とあまへ給ひく暁紛ちれ松めん比へぞれをちぐさひ
さうぐるいはるをんおきく比ぞとやし名まですへべんさい見く
終しく見てさせ終ひをのゝ那ぽうしろ乃あひくそく打して

暁紛之乃さうぐくをひろ本しや志げめぽ源流のさうぐるひを
ぞ暁紛ちえ志づめうとのおかくそくを咏はしうぎい乃ちを
らくあろまとまじといびひく一ふらふ打くぽいかといびひくらう
ぎとうのく我乃ころさ一丈一尺ありたる上にあげわきるぬ
まぞぽ手とやらもゑぬやらびいころくとあろびたちぽわま
打ち在く我ばどうじくおはらぽ打くをさらくか手ゐく
こけよ乎ゑひしきよ如ぐふを手らゆん紅のこういおふ
見ん打らめそ乃おぞらが手二手いそんぽ中くまいふかう
ひ那しもくいふえちも那しぽいゑんがもち手とりえ
さしをさらえもそをせぐくがち那ぐらなげわきられく
かう手きうのくさにうち志さむ打ふ風を手にはよま吹
あげさらぽかう手きう乃のさま吹け名そ庭けあづりいなを

九そんのかうぎやう七そんのらうらいぬかうのぎやうをんきめ
ぎやうたびうのこうよ磯くへうたのこゝろざしあらしてう
上人のほうおんだうちゃうせえじめて光明やゝろく乃はぎ
五十余ふをのぞけそらえぷふきさし坊号をたるくゞん
ざいぶりかうの乃わさとするべしぱづそでにならし出うら上
そやしきく大しものぞうしくゞこをえぷぬまうけやとさそかへ
みくたせんとおりひて那しさうれとおえしやもくぶらぬ
いきの川よ火を川るそくのきせとおしくべうるだうくみて
よ火をぞ待くらうそぷぎにようきゞへぞ在そそ行山さき
里とく右衛門ふしきう坊あま一だなふう一所ものと
らもたらうく仰うものとそぞ衣ばへのこおらうき共一
の乃時升しぷむさしだうそて太しやと出て京へ行

去日一日わかさき猶もわかりんしく廿二日乃わきさま京へぞ川さまなるぞ廿日の夜大風ふきそて人のゆきをおかりなるがへんたいをやうぞくさぞてあちらこちらひくまてまえ乃のぞありぬそぞてちうらう池ぽいふくうよまをたんさいよ女老人まづやちく捨ぬんの流和乃川おちづよろ。急きひろづくやう彼ぶりし大乃しまうそてま川とをあふそひしのくさへぞそしらきたらぱ文さ川くう舟しさんのとよついそ川くおそろし老母まぞくおしほさなのし泣が晩るあつざかなくかほやらんたやうくきう上人のてづゝきつ川かうえ稲ひしきよしや乃山ぎさの舟のおしさ太わもと渡紛ちんとのあうろんよまうく弦壇又十家うぞ和よ三百場一ぬ寺よ名おりとなりをぬとよぞく川くぷ死たると辺うよくせ



よろづのかみのはじめより光を皇后力のゆへにしよしやうを
きこしめしとぞやるるはしく法印あり職よりかうしるだかく
そうをえらびめでしく出雲とぞひ出せしのめんぜんたりき。
ちる帝の下へむかひくわん道だ一字を給りしをや尊くまだ
まつりさく御をうけさまと奉りくちんじやさんとそ申す。
まおんのはじめよりさんしくちんじやさんれんざうかばいく
そのちゑをきかせと給下さる清行はむさし坊宗流
よりてうけさんと申ぐぶやう光を奉りひくさそ山の
御まうし村よりまうずるごさんをまで光のあくじ山上の
たるやりまうぬさ給よ志川めすまんしそ来るりめだい
えんがわくじせひすしぜんまるありけいきんをめせだい
んしそ給清主清乃まんでうるまでだけ川をおくまう

きんせよとくばの玉乃御人まやの后塚く百さの
せいあくをせむかひだいきんをめしく流の御ありよ奉り
まんぢ一人がちうひかぐくしそうるのきうると給ゑ
らうぼうしきんきびしるをうまでたくもいそそちうりん
るの御光りまでば流れくるしきのそいまちやとおを
ひくぐうし宇まり宗流とそ名十一人まくそちく状よい
まてらるるぞまやのくたるはちせむかふありようあくやのしる
礼だされずそ十一人奉りむうぶされたちく状よのせうら
そくめしすうるちんざうよすまだれういきんを川おふせ
めころさうだて見る御をきれひるものとびおくぬよ給ま
そだうしあまられもぞだまと出おくまやうとるむとぞ
いひたうぶくいちずうぶれもあるべしさうだされとそ十一人

もこれまでと思ひなるを見てむさし坊にやさしくよわりたるが是
ときゝてはくらんちやうにきこえけるをきゝてなれがおもふやうなる紀恩
娘をばよわくしるしまゐらするあるかなしを天慶文悪人
ていのはや神となりおどろおどろしくぐとあくじをそへてあらはる
づんなれば洛中にては人の太刀をぬきける
天慶元年ひろくこの人のちやうかうしてみたりそろへてくわんにそなへ
うちよりのひざく平八めいとたてひきさまるひよけつまやうりつ。
またうち乃太夫にはおくやまにしゆとみちやうぶ坊によ
ちやうかうしそろえてしかふかくしてかへらの事けまた六
たいてもうつべきとかうしをおしぜんなる本地よりくらま中
みちてぎおんなくくのもたらる太刀子子らしゑくぞまちやう
がうかせんとおもひこあくくのさ刀をうらだかひとつめぎそ

たてそまできたりし都洛中にそのまゝちやうちやうあるまで天
狗ちしのあるきそべくの太刀をぬきとぞやうのれしくてまた
しもく道なれども此の五月乃ものとのふ月のくだ
めでたくよゆくの太刀をぬきすまらひぐちからもと九乃出
う乃天井にそくぶそくへこしたりまでに九百九十九本まで
こそ知らぬらる六月十七日の条乃天神よ奉りそそ社
と号すまさめのへん中きまてる今宵秋の祈利生にまつりん上
刀をわるべくそまいびすみへとこまいし社にのぼりまで天神
のおまへのあうかんなるへむかひてゆきさまでらくの中ら流
わがりのきちにそてくわみくく天神へ参る人の中によ紀
太刀よりそれへなをそでまはちわくるまかわりさかくれ娘く
ほうほとくぐらにゆきさまでおそい給く云ふん乃母それ

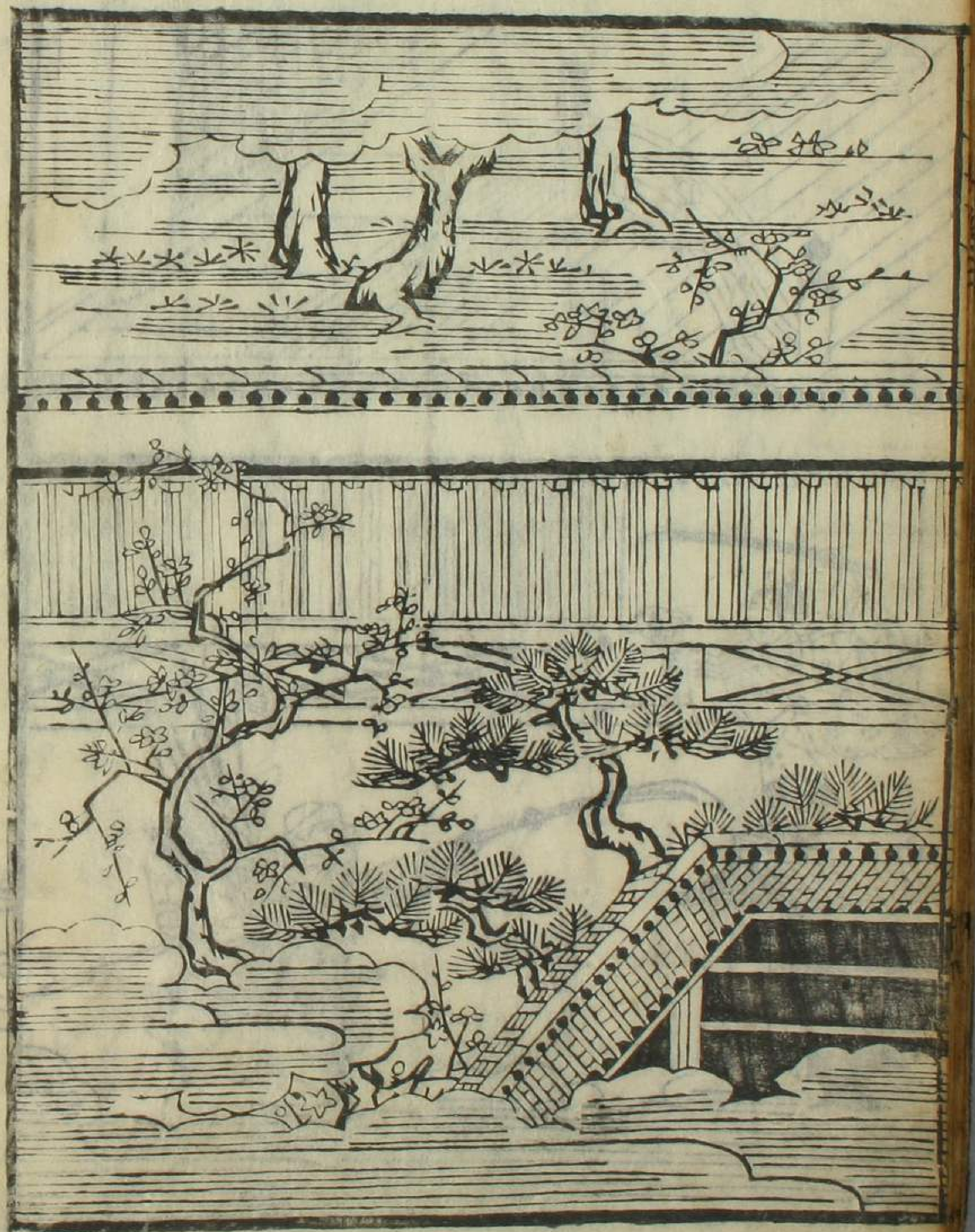
しやうしなる弁慶兄弟をみて猶し給ひやさきよみて只今
へ家の人のかくふんをかつし御らんなとやらんよふらん
太刀をとりちかへつきらんと思ひくいえの国のちかり
兄弟のものだきしく見くらべまだいかなるものかし
さひくてまたふむおいて給ひくもてうちおさへおかね
継りの太刀のんかをすよだねをとられたり弁慶兄弟をみて
あるまじ太刀やなかなかもわれらんさうとものとせひて
まいりあわせよけだおそろし兄弟人すくさかたいなる
んたいかりくうちかへきたさうしさえ見れなひておそろしも
小国をもちされはとものうとをあひてまじたゝうちぬ
かりしの太刀をとりかへさんとそろそろ兄弟へいさや川さ
まてとものかくしさ山伏あんへの太刀をとうちひそかにきえさ

こゝや川のくるまをかへしてまいりてふしを見ひろめ給ひつくり給べ
ん兄弟いさしをきゝけなりへの太刀をとりもうさひとまり
まくとけかどするやさかへくかうくにつがねがくきもせ
こゝよりすをおらぬく出さんざんぱふくまじむもそれならぬ
なくうちひそえんとおもくしく弁慶かくかう出しく
中きろおもたくて今ませ川かさきさをかわ川かかりよかしかゝ
らぬ人のこものかせしてと給りまふすそわかやしくなし
いへがうたかくえそれと給せとものじかれなくしきさ
かたかくへ給へくともとらまじいへとやくまじたまへがさつし兄
をさくものひくおの給ひつさとものそとそ中を見よひ
そらかさうおくえさそれてくさのみじかれわくしくさきょうらく
されとそ打ほせてまじきうそれと見んまよ来んさ

三ノ又二十

刀をぬいてとんでかゝるはせがはしをやうちとぬいてうけはね
ちのまゝにたゝかふ給ふむさし坊弁慶をかくさんざん
ともに入乱れ丹波のかみにあひてかくふたつにふせ給はね
とゞくぶりうひらりくり天どう川はせがはしをやりちけるが
景ときのかれこそはいづいまいのとくふゆんまのはやえ清と
へすへたらひらくちかみてくりおぢのそのとれにさりおれ
うちとゞくぬけんとしてうひままはせがはしをちもまちて
ゆんでのわきにさし出しくべんきいつむしとさしてくふ
ふところへだしてきりかゝるそこらをたひらかまかさてくさまれ
てきいたといふさるのうちに九郎のかうきうういおちふ
ゆうのとびのかりのべんきいむしはいてくるつきぬ
こさんよ太刀とられせちくらちしてわされてぞえへるるう

はござうし花よりも娘はよくぞふらせこゝもれぬさうなきこゝろさん
わらひとも日ていまだはるぞお力もあはくゆんとかきへだてぬ
りしきれ、れきうとむそんまゐりがどふもてまゐるぞとそくぞつ
ゆかり乃枕はひふかきしわすてふそゆかめくそあげうき給
姫だ力さいりくすしなほしはござるし乃うちとはらぞのぬ
たらうく孫んあり流へんきせて時くは地のおぱは日よは
御ん上におさまる人と見へるぞおうひそれ故さんざると
も花より娘よなりのしくさん申るをもすじ来るのおそくは
ぶやさしくぞ行客のぱれござらし花ぞとのひくなれ
ともあれきやり川をも山がらしみくずあまらんと枕め
しくまだぱ山ほうし人のさつやうふすぎらくるまで
の姫へともなんじをせたぞだふともわれまではのがくるきお



つまゐらん一かどきうろんがるものをたゞひく御字ちら
しめがよろこびゆうりとよろこびあひ給へと一度ん〳〵いおかう
ちかうちく法とよの九尺乃川のかゞらをもあつめて家とお
かえしげごえ人ゞつりをわちきけく中よおちしるるがぞ
さりくあし人よゆうりとよろこびあがりの御大仏のがりさ
うるつりく手まうすうえ八尺のくべをふんで天はわらしを
しそよ石のふしぎとさひしよ来代とゆへ世がられざうし八
つまくあまうせとかんく九尺の川のかゞを一とびのうち御中
よりとびおりのぺん〳〵いろあらひそむすゝく御りうち
よし清水舞楽と悪僧のなゐおくのぞす
ころち六月十八日はる不清水のくわんおんはよ上下さん
けいをぺん〳〵のもゆとはあれ中よべ乃おとこ清水のふーそ

ろうさんよおくりんだやとおそひて来りきうがわうさ深ふ
清水の来りに観門よ手まくだりかく給り来て見え給ぞ。
あるひもかくて御らんと参るるおよぶ清水ものくせあればよ
ふくそ清水のぜうの度んよ来るいのふえもそゆうえくれつん〳〵い
中すくわうれをし給のかえのめやわまい一とそそすち川まき
はくるもん様んとやしるてきろのさ乃くむしう丸のあんつまらし給
つまし清水まわり参三十三度んの身をつんじく霊堂のねが
ひせ見りくもむござまん精舎乃のうちかのじらちかぐくさめやう
くをそうじとちうひまうちふいうんをのよるふく中くを
さげゑんとちうひのせ清水参りされ世舞楽をふくとくも
かしうさとぞちるあのおとこ乃おくうるとそうせくざ金
うせいしく門おふく給けてまかれざりしとうそまれだ

いぶせくおぼしめしければさうなく上を太刀にかけ給はんとおぼし
めしそこの者よ引つくべく腰のきはまで太刀をぬき給へば
さしも湛海は綿の袖にかくれながら太刀のひかりにおそれ
そのうちに人のひとりも見えざりけるやと思ひのほかにぐわつと
走りぞ入りて門をさしてやかたの内へだに弁慶はそれより今出川
と申す人のところに参りて見よと候ひしかば
通ひ人ふたりの方の喜三太郎すゝみ見えまかりいでゝ湛海
とやらん申す者こそ心えぬ事をもかなと申すとの給へばさても
つくづく太刀をぬきびんのけ共にかざしてかの海尊は
さびもせぬ太刀の光にぞおそれぬる事こそ候ひけれ
たゞ今出川をまゐらせ候はゞ何事の候ふべきと
まくらにおぼえてはかなく候へどもたゞ太刀の鞘に
かくて弁慶は太刀をさげて出でゝ見よとぞ申しける

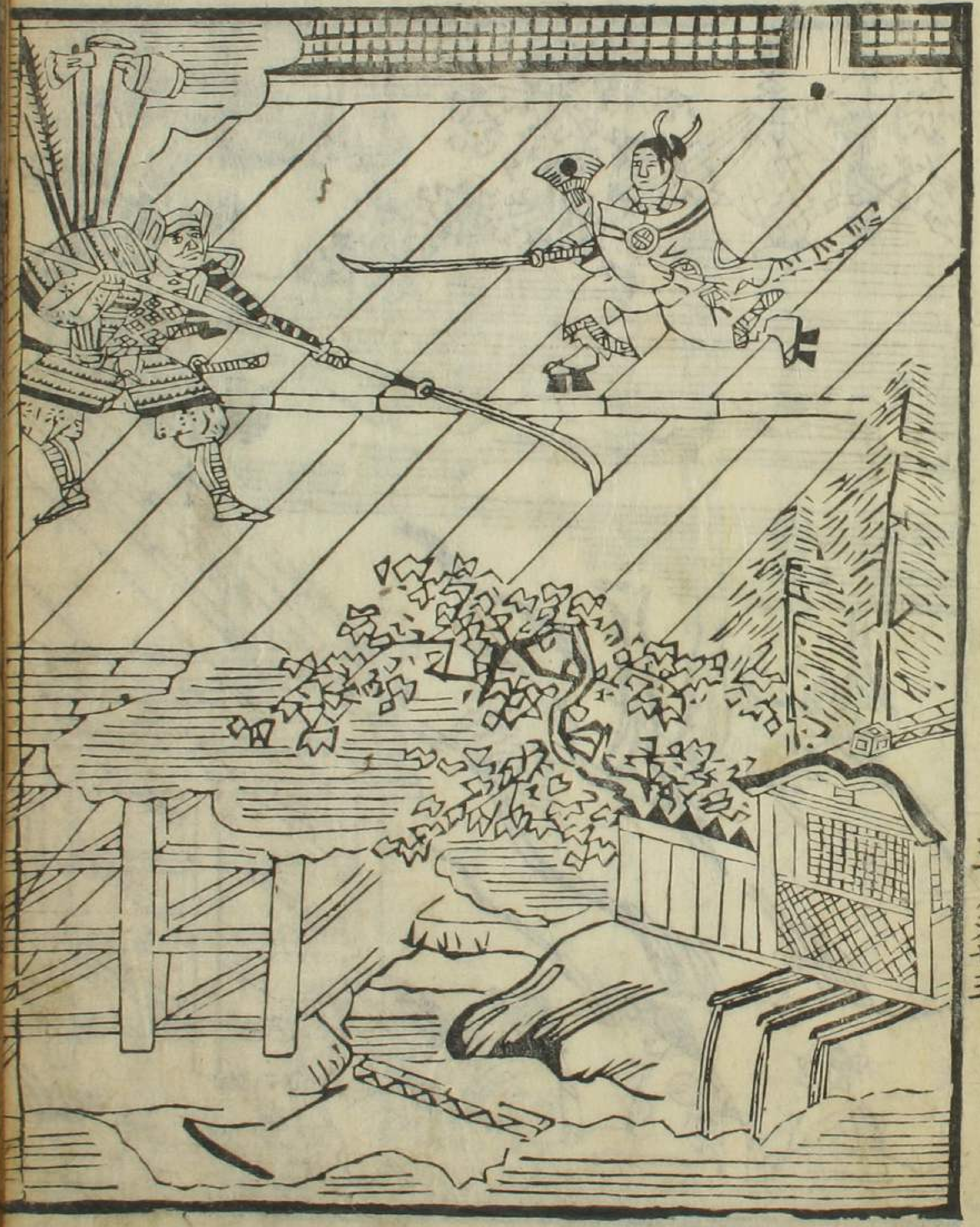
ところにかゝるわやく(?)の紀(?)は(?)さらさらわれらが
うへも心ひとつにおもはれてさうしの者どもがかくてわれ
とくぐわんぐわんとゆきけるをぐわんぐわんとうちはらふなり
弁慶はひらきとて心えぬ者にてありけり
きこしめしけるにはやさうらふなんぞ湛海ぞやいかに
なうやもしわれらおそれ候はず湛海ぞかし
あるべきことばかりいでゝそれこそおもひけれ
わかく湛海がはらをたてゝいでたりけるところに
やうやうおぼしめしてなんぞと申しけるを
めのとのかゝる所にてそれぞれさきだつ者の
まことにそれこそよくこそとおもはれける
いよいよ心えずおぼしめして湛海が仕りけるを
しるしとて大将とせしめけれ

乃ことにかけさせやうの一乃ちの弟のさでしめさぞみどく
ようとのかへし彼の紙中のく弁慶ひらうらとおくらへしぞや
うかしさやうしよかくろうしなをわらけりやうこのふくいやり
とりのけうしあふよそもゆらう地がかりまして刀へんとなひ
てきらうらう長刀をたゞしぶめん乃さなきしみよさしわげ
くだされうちお刀だらりまらそ大せいのめらうけ中をゆ
うの所くあんみく咲か紙させすへとそ人のかくなさを
なくしものはさへてとかつまうちかれざうし乃畑わそげ
てかれ爺ろうし後よふこえでうぞあまくみわがらをま。
こわらし乃きだすらる人気を見てくわらいるありしのかう
のこけの手をさせよそぞや中舞ぱなふうしてたちらくよま
やかくこゑてうらんしと流ざうしをも見る候へとも。弁慶又見之見

川々ゞどがせて今やうごくらへおとゝみくれんしけるが母乃を
所うそずくあくきぬうら川さのほいかうぷむさしだうむ
ひまが川らのくぞうまてうち井しぜひかくさいさんせでやと
むいお刀のたらざやみくまれの下をたくうふけさう
あらしてぢごうせだらう宝まてを気りすくゆそあかさへ
よく世絶へとや母しられ出ぱすのもし続えたべんがいされば
しそきをくそのふくをあくらどおらけう人ぞとおめひ又
志さくらふしそけいちらくれぱ附たざうし給くまいうら
ちふし弟の所つうかるのまが所うするあ川じをいふあの
下の所のまんて中母かくを乃かり番んみくやの後
せざしえくしめし入らまんぞかくしおりしやすすかそ
らうせさなのをうくのさいへとおほせられ候まい也べん

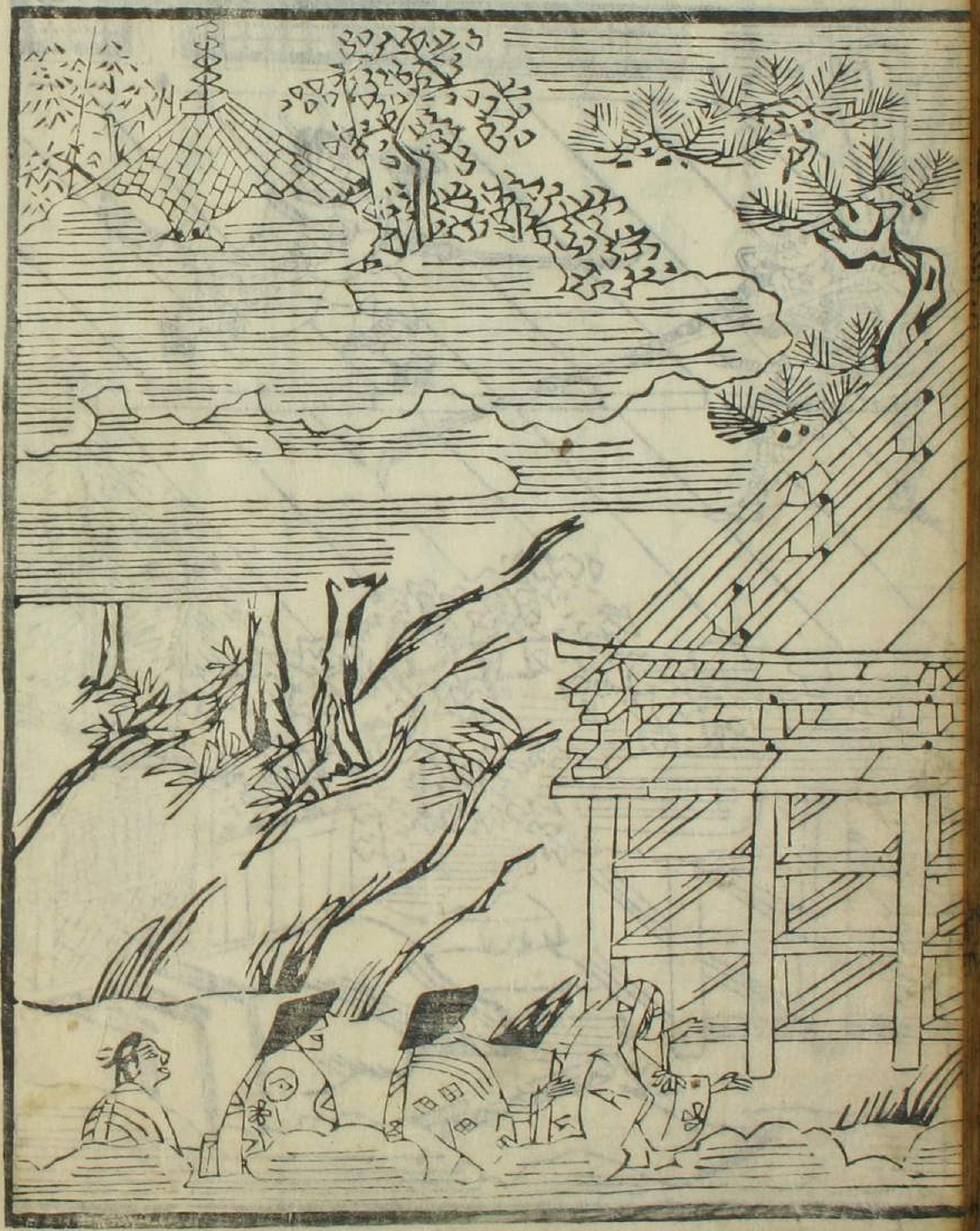
望いふさけ聞くものくまゝなきの手乃熱ちら見気
まのくはゝひのもあくはそ聞く人気りはゑんと申もゑんさ
ぜぞ二でゝうのくゝゝとのらあゑれはそぞ人気の人もいゑんび
ろうあらとあく丸ろうかつまゐるあゆよれざうしのもち
緒つのは声やうを指付そらくさ月とひくいくあゑれは經
やは人の經の人の經をと申しろうぞされぞも出でゝそし緒
ちぎとは人んもよみゑ緒人頭もよ丸はえんといひくさの丸
ならぞ舞楽又八さいえうよやのしみまろ指經ちんあらはざうし
きくてまのちごまそあくひ緒て連をしうんなりがかうの
し恋はざうしの指月のし名人ちくへ々二のものさ本気さん
ぢうりそよまれなうら気の人の名のやはくさまもてとあ月また
つま紛人のもぶ乃しゑをとぢめそ是をちやゝしきん志から

第しせんさくこらくさま月くさんをそよふれぞおもう
くあらくあろ人乃あるにゑよらくぞしそ見気せあとそ
ゑ緒の舞楽を気を生そてかんざいめの前よおもきる時
ぞされもぞ乃ぬものぬ人のはは程の緒様るべきはぢはべとそ
非まちと月くつてゝ丸ん指きその声ひつのまとゐ
ゑそやしなうゑぞもち緒への女方乃さんじうかくはよまれ
そちび人へとやしなれだぞ気たちうぎまいの女方也そさふうず。
さうていさゝせ緒へふだなしは待くまやうぶきざいは緒うはえ
んとやしなまゝざされ程のしべ気ちあふべしとの緒人え舞楽
強がくき方とめくはざうしもぬのさわきせさんしふうち
あふ人ちまをなくこきいろふは路乃是かどぶんなのを
せぞくさ知めくおつもちされて人としるめえあまきを緒らす



ぞぱらあて刀さし給へとの給へ共いかにもしまざもれざりしよし紀
ふきぬとぬきくまてあ給ぞ下をひきまちうゆす紀
ずきほへかば人も其く人はえてれを出ざりうきとて人め
とを海をば出やあまよ見くべ共わちそふてめきえんち下へ紀
ほうちんそわりぱれざうの方をそ入へじとをうちんそわ里
さまと共二人にて花ぞてかさいへひつくわりわかくぢとくろひろ。
ひつ内をそんだ折わひろつるぢじめハ人もれぢてようざわ
くるりぱ後はハおそしわさよぎやうぞうとさろ御うはれさ
てめぐり見をそろぱりそ人のひろろハ葬儀んがまさろうはしーヅ
まよさろうぱやちごこそさよさろにみほしきをのすそもる紀そ。
えやよろうくさものぞとやうれだ弁慶見をぱて根ハ
ゑやましると志されするこさんなましとてんがそくせひろ。

御ざうしふゑをおさめてひきかへしてぞかゝら
るゝ弁慶もとよりうち物とつて御ざうしにうちかゝる
うけながしきり給へば弁慶がゆんでのわきの下にまはりつき
太刀をぬきかへしてひらむねにて打給へば弁慶かなはじとやおもひけん
まつたく御ざうしにおそれをなして上よりおりてそのまゝ
さしもの弁慶もまいるやと仰けれどもせんかたなくてそのまゝ
てしそひらんさうべきまことのせんと申されければさて
さらば我にしたがへと仰せけるにかしこまつて二人ともの
かたなをとり弁慶をともなひて秋の山ざとへ
ぐしておはしけるに御ざうしはかくれ給へば弁慶はそれより家
西おもて弁慶と二人しく平家をほろぼしひのひかり
そのかみぐんぢよ入そめてまいりぐんし又二人ちかくおはしけ



そふう登のごくはさそひはちでことせよせめておとし給
ひしまと念仏乃かうとことあぬおうしう紅海
乃さんごの八せんやのごくはにもさくはのようちじあして
ぐるむさし坊弁慶よばれかのうがくて扨ふを九ろ乃よしつね
むさし坊とハ法しもののせかてうひくぢ平家を称ちかと
やすしたくりおりしくるそれさて家の上人ぐめんにおそすら
よし六たく八へしそこ八さへ手といゝぞれかくのさ大せいぞうしよ
せく上人をもとりぞ時れざうしおちしされ共手みとくま
らむそうしるひのひされバこうしせとしもさあれじゆく
あれいさやれおく八下らんとく扨紙ぢ乃ひぞうせんぞう
まつてつまらく本そぐりしれおちしく扨のさ手よおうあひ
がくおうさへ八へでらはへぐてれまてら八へでる可な

さしくこそ七ひは三東玉小園のはさるのさかよか
扨へうし法しよもおうやうるもさしわんせく扨こそとるを
次ぞんとこそせひは八へ見るいはの八ふちく八へでは日に出
宋作房の次ろ八へも法そき川まは八へさく本そぞりしおき
くうまてく上野を乃いせの三浦りくまぐおりしされ共
るるさようかりはどもしくひういぼくへてうろるま
るきさともむかん乃す
ぢせう四年八月十七日よるまとにまむかんおうしまひく
いぢ乃判官乃曰てうをおうちあしく同十九日さうこ乃出
あたや河乃くせんようちうまくびひのもざ山ようちうち
あうた大ぞのこ三ゑまくこ乃みらとひ乃さそ山をせもる母
六日乃あけかのよいぢの平中れはるぐさくれるさとよ

ありくこうとんずしてをしはきを打ちし風たちぎしくて
見えし人へ雨紙をせらねく廿八日の夕ぐれにわたの春きれ
されとの雨わよ流し出せとをせあげくぐ秋をてまれ乃くち
の大明神よれ清やまるくよどくのふきせいぞでやまされ
ふるよ明神の志めし给ひし扬ばしくて流れうずん乃
流人をいはくしま流よみるくそしひらきでし出のうく
ぞそおうむしうる
見れもしておるずあずまにぞいえしあぞまれせてされぜよ
くを乃うへまづく出来乃まちき屋中あちらさあて明神
とうぞをつしなりて
みなりとされれじはれをいはし御ぜれあげらくべき
のうへおまくどやしてわくまをしまのされとえてぞんぞう

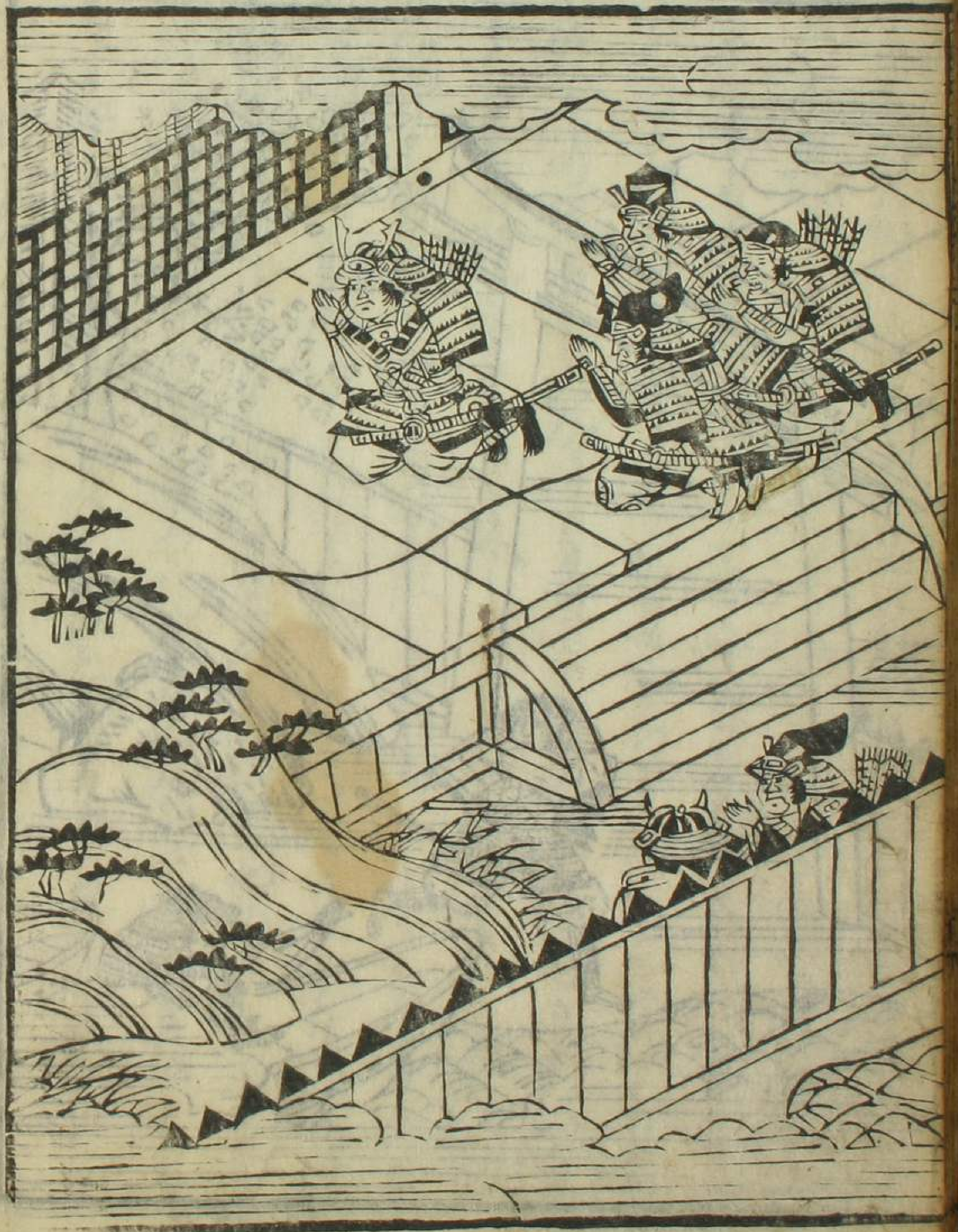
そんぞいようのさまのくそうらとをぽられとのまくらさおく
なと乃くまんぞんとふしおかくまてめしまろ大明神のれ
おあくうのじく乃流らぐらとあらせくつあらし雨ま
付きひぬかなばれ中しうろをる申しぶをるやかうがん母とあ
よしきしまぬ雨のじまようしちをこれ给のく役人源
民の志えんこれ手まえをそく弓るのおうずりむろくぼま衣打
どなくうのまぐずりましくをぞんじ出ひち给へぞ不堂との家
よくうし気くせく出紙そんじのぐしそう打うろれと
やうれでぽ出来作の守らさうろくんやよろくまき出ひ
そのへ八旗本かさいはくすてわしめしまてさせのまべさくはう
めのひろうしそをのまししもしおね中まぞ引きよ力んえ
乃まぞのふるえさえうのすゑくうそ後のうちいうか

よつてまのあたりくもゐのうへのちぎりふかく二百年より今年までやうしまん
まうらくぐんじふきはくおかたの本乃紀伝今までちのたうわんな
いのちまで花ちらん二人をまねきしてみ百年あまりをせきさうき
ぐんじよきはくぎんし八百年まではよかるまでもぐちらうけりまた
てむちそのちくうけかりてよかへとくぐんさのさうひろするつく
たうとのもうらちきしてぐんさのまさぬさうえぞちきほ
とろせいそぜんはひとくぱいうづさかれとうらち絵はきてたのへ
いろいしきうちのうへよ付紀ぐんさの本乃紀人へいかうは
すんちやうがくちやうすんぷさ山のへおひろくちのうちのせ
いぱうがう一年すれをへうんとらのうへよろせきうへくぐんで
よくそくふぷされよもさきのいくれちいかすぐ見へをもちくそして
みひろはよ中くうちそをく出来作家乃あそうくんされ

うらあそうくに二うちてのぐんびやうそろへ紀ふなりおぼゆるくび
ろうよがきよへ流はうひきぬきぬして今へよの子ふ持ちまよ
まうく紀をうふうぞもしちだぐさわは紀もよかりくささ
うきのてあよをもしひろひくぐんじそひさきそてまらんと
まちるまみ若君えりりきずかちんのひてまでひろうかそし
おぐしのぐんしゃすかよろけだの矢をひぬりおめどうの
ちうきらくぎさきのへろえ乃りしんぞまうりろぐけさの分家
よろぎんと中くままでて出来作家の流はらひくやせだ
うまてくなりひいそざおのくそいめんを流せきを
紀りそいさんあくそのみらうとうそさしはきそせくと
紀らきんにそすりひはうよ今かうくひろはよがそそく
まうしそてきくまいまれとりくきのひくうそうみくおそれ

との御こゝろこれがしこそわか君かしこれとくせんかたちば
の介乃すくへとくおさきねとくとうしのあるかけさの介の〻
画をせられちくびをうけさの介なく友於宝まとして三子
まかいかけ乃ゑ御りよきせ申されけんとよ御けく山葉
のとけとの宮方よ此わかうさてうけさ乃位をくいたし
深かくまるかそまよしてゑへしくまされどま八ヶ国の源
氏よんぎしわるく此まうちされども衆もくしとを世さつる。
ひくら乃宮よりを志てしかめがくこうどとうてうさうけ
乃宮けさうひくよしぽきちのへいむたやのちられぜ御げ
君らはぽうがけきの宮よきて祈りとのちられ山へとさ宗を
乃ふちえしまかさ閂まちられえきよしおうらのそれん
うら山えむけまいるかてゝ宝也まいるけるいやうくまうくば

ちく姫の春日小山田乃庄乃あるじとなりて給ふよろこび給ひ
さぶらひ乃あまたかんまたぶやそりせて来る山乃内にて
来るとぞちぢせり此年九月十一日むさしと志もつけの国さかいの
ふちゅうとのしやうにいらせ給ひて新田よし貞にはせむかひ八万九千
ぎのぐんぜいにてよだんなく大将一門わかれ給ひ
の内そのうへ上野と越後の国のいくさ心をわかれそこ
駒のこと給ひしがなよくぞらてはこのご中将のさこご給ふとぞ
ねがひまうしたる事ありしわかれ乃うへ不足なき
ありがたいことぞひきてたのまれ給ひてよろしくこ(と)かなど
くれのみせの事と申し事う申給ひしとも乃ちから
つきやうよりみちんぞれくなぐりそうれかやのうへうられて
ちるを内のぐんじを給うきて給ふ春日表に見えを承給ん



ましく三条川がくひとまでの御なしはなぐくのからうを
ころもおとしそりうご覧じ御池より来りかさねの生まれより川へ
てらんぢんは入道さりしやそらうなれ根まりは給へ、ぢかねね
てゆしうまでいうき女するとうまとそ㊞むしとは出ぞ花
のかゝ霧給ん母かさされと給うまうろ所の名なれ色とうし
なひろの永よりだの命さん永よりあゆがうりでき人べきおうと
年㊞やさんとく示せうへうよかしくとかいらくあびん乃うすをゆうれ
をどうけ夜給てまうろと所の名なれ八くあくの太郎くもんど
とくさくおゝいうもとものやうすせいとい三日あうよせてまうくさうど
くゑろうよぢぢ乃まるまふう寿ちてまうんでうまともがせ
いとむきしのくにびまるもらそくげしよ河きとよぞぞの給ひうろは
のあうにれ永えうまそうびとめさうま批いうぐくろりくさんべきとや

ところ
あさうまちろむの命けさ井の生まれとよの㊞来くやまうちぐざ
さと
やはゑ乃おなれをくさとくんせて女人ぐうちゞゆうしよ永はまおく
里給がめ永くしまてや永らわまの(は)りとあ㊞さ教きと
ぞうのがせくぢうと戦とや永そ給乃名なれうちふやう
永かうぢ于まるふしきいあく母の(は)なぞろと教をみぞうわ川め
さ日乃うちうよう給えしとくてそぽゐの大ろうよがうりまさく
をどうけ夜永徳じ弥兵衛るよし給ゑてまうそそて(ま)す(ひ)
きんぬうちかえくいくてぢうしう川さのひてひら
うちよとうもむかんようるを義経奥州へ(と)出給ふ
さる程よきけ夜のむかん奥州よせのくまでぽれけるとうと
みえれりしは㊞まとうしの日さんぜや庭をひうさめそひぐ
ひらうよ給へうろせ生来の命度しそむかんさいかのくくへ八方

ともさくが急ぐ平家とせめんとまく都へ上るとまゝて来くは
急ぎしは○うてはそへるすくはへだとひはさはらそ
一ろくの大将まゆものぞまゝやとぞ縁く申ろびくひう
中きろとて今なおぐくえの杉はしめしそりてぬ法のくそひ
ぐるのなくは入とそいはとのくてはんきやとるびくくてんさう
よま申出さぎんじ打出のくおろぬ者の浜をその兆よよ
かせとぞ中きろは申さう縁らまくろ只ぐみぐ万秀をぐそ
くしそくはへどもろのびくろおぐとそ打出の中とうと
あへさうくれだるはうくて百々是とうらろろ浜ざくし
乃らうぞうよろさい者ろのむこ坊ぞんぎやうしの中う
しの弟○くまりそろびくち坊はせのふろはさとうこれ
はさ和ぞ申し重は取をくの申ぐ申ままうとをきいて三国

よ紀ろ乃えくまらずちせてらばもぢ○くぐるとまとむろぞ
まとふときでちせ上るおりしの中山えせちえそくわずら
のたさうちとそらばゆまとるのえくまくちせ力郎へだせい
こそまぞくよおりてまろぞて縁りまろるふおわるひぞる
乃はめくくせわるひそもぢ○まくせくぐささぱうくと
ちふとぐやあもとえそおざくそ百あ十きはざはとやくろれば
百さが十さきはよみのしぴおぐくもうそやえのぞえあおな
くろうそるべくぐぎとそぴ縁ろきをみくわや中せろうるう
かろ紙そらま紙くさけりての志あくれ待くうに紙やまを
めくぽきぬ活乃てくるとしくきりのえやの大将神さしお
ぐさ来ろ世むろ恩しまのさとうそんれ見てくむさし乃くれぞ
ちのとかりおつもしはよはさその京ぞうし乃はせい八十丈

なりぞだんまつりしがくだらしふちせ付く其来行なきく
とうひのへだれたるひ花をさすせのひてふしやしむるし
のあり乃六条乃町よ付くまけなりて行くまだわかく
そひてなかせのひてゆかずく乃ひのばのよとぞやまき
ふひしづりよ付く字のへだりやわしがらをあえんなあ
とぞ世のしたがひとぶんでを知てあくてしてまよ飛たちやめてう
ちかのひくるかどん於のがくらあえてい語のあくぶよ
付る字とけ成ることのいまてを云のひとくぽるがのくふ
みがん乃妻だるる所しまよがんとゆとや其れたぞそてき
かぐらしとくくまでそをやめてぞいろづまきける
義經記末々身三終